創作 ごきぶり（二）

【入選二席】

三川支部 如月ちかし

弘は狭いスイッチ座のなかで体をよじらせ、備え付けてある電話のハンドルを廻した。

彼の耳にあてがわれている送受話器に、金属の歯の開かれる音が伝わつて来たかと思うと、物凄い音をたてて廻転している原動機の騒音が機械工の応答する声をうち消してしまつた。

弘は出来るだけ大きく、はつきりとした声で云つた。

「もしもし……操作盤にある電流計はどのくらいとつていますかね」

「あー針な、針は八十ぱちつと越しよる…、あーいま七十んにきばうろうろしよるが…」

原動機の物凄い廻転音に交つてしわがれ声がかすかに聞えてきたが、後は物音一つ聞えてこなくなつた。

弘は、コンベアの石炭積載量を減ずるようにと注意をする積りで何回も電話をかけたのだが、何の応答もなかつた。

弘はその連帯性のない、無責任な言葉と悠長さに腹立たしさを感じた。

組合員達は執行部の指令には、すべてが強い組織のもとに団結するのだが、現場での組合員達はそれとは変つて、連帯性のない自己保身の固い殻のなかに閉じこもつて、少しでも多くの利潤を得ようともがきあうのである。

機械工にとつては、電流をどの位とろうが、原動機が過剰負荷になろうが、そのようなことは彼等の意識から遠退いているのである。でかい原動機と機械化されていく諸設備とが彼等の判断力と連帯性とを弱めているのだつた。

山神甚太は詰所のなかで、口を開け、眼を閉じて椅子の背板にもたれかかつていた。

彼は電工達仲間から、甚さんと半ば親しみと、軽べつの入り混つた愛称で呼ばれている五十の男である。

彼は何時も退職金を計算しては老後の生活の計画をたてている。

彼の組合意識は、五十才以上の者が一般にもつているのと同様に低いものである。

彼はよく組合のなかつた昔がよいと口に出しては、若い仲間からこつぴどく攻撃されるのだつた。

やつと採炭終了になつて、弘は詰所に戻つて来た。

弘は山神の姿を見て、苛立つ気持になり、荒々しくキャツプランプと鉄帽とをテーブルの上に投げ出した。

その音にやつと山神は眼を開きけだるい声で。

「何処にいたつ?」と云つた。

弘は彼に背を向けると、「故障だよー」と短かく、たたきつけるように云つた。

二人の会話はそれつきりとなり採炭終了した後の静かな時間が詰所を包みだした。

弘は疲れた体を長椅子の上に横たえた。

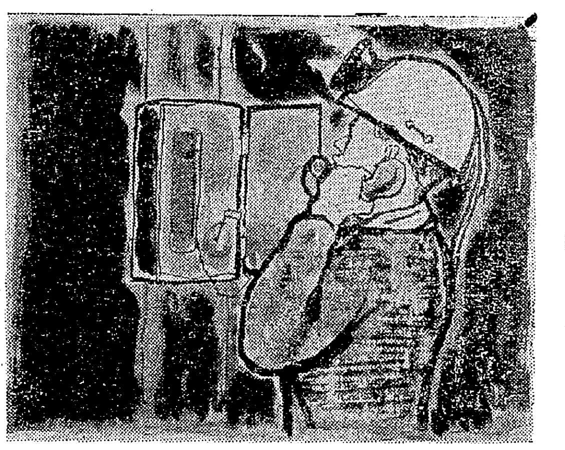
彼のうつろな眼は天井に吸いつけられていた。頭のなかでは、まだ電話の五つベルが鳴り響いていた。

でかい耐爆電話器は、いまはまるで飾り物のように弘の頭の処に立ちかかつていた。

弘はこゝ二、三日間、五つベルに追いかけられていたのだつた。

そのたびに、彼は電話の引手を取り、無表情な機械工の声を聞き、危険で、歩行困難な坑道を往復するのである。

その単調な行動は、湿度と温度の高い坑内に於ては、彼の脳髄を単純化し、人間的存在をも喪失させてしまうのだつた。



天井にぶら下つている蒼白く光つた耐爆電灯の処からばばたきをたてながら一匹のごきぶりが舞い降りて行つた。

ごきぶりは板床の上をがさがさはいまわつていたが、仰向けになつた体を元に戻そうとして、もがき苦しんでいる小さなごきぶりを触手で見つけると、腹部の柔いところを喰い始めた。

弘は、うつろになつた眼で同志喰いの醜態を何時までも眺めていた。

（おわり）

選評

真鍋呉夫

この作品の特色は、ひたすら主人公の内部にメスをあてることによつて問題を追求しようとした作者の手法にあります。しかし、作者のそうした努力は、かならずしも成功しているとはいえません。それは、作者の眼が主人公の内部（意識）にとどまつていて、これに対応する外部（物質）にまで及ばず、したがつて主人公の内部への追求自体も中途はんぱなものになつてしまつているからです。たとえば、主人公だけが被害者として設定されていること、それからかんじんの仲間どうしのエゴイズムがあいまいにしかえがかれていないことなども、そこから派生してくる弱点にすぎません。

雑記帳（6）「垣」のない家

加藤説夫

終戦後、南方の飢餓と空爆の島から引揚げて、昭和二十一年の一月、十五年ぶりに故里熊本の田舎にかえつた。ただ生きて帰れたというだけで、無性にありがたかつた。私の身近かな友人には、生還できた人は殆どいなかつた。

生家に帰着して二年あまりは、身体と精神の保養に費した。それほど根ぶかい打撃をうけていたのである。生家には次兄一家が大牟田から焼けだされて来ており、さらに私のあとをおつて、長兄がテニアンから生還してきたので、家が手ぜまになり、私は一段半ばかりの前畠を貰い、十七坪の家を建てた。私が新聞社と陸軍省からもらつた退職金は、二年間の生活費と、その住家建造でけしとんでしまつた。

爾来十一年、私の家は内の造作もできぬまま、畠の一隅に立ち古びている。垣もなく庭木もないので、道からも畠からも、家のなかがまる見えである。しかし私の家の方からも畠に働く人々や私の部落から隣部落にゆく人、町に下りる人がまる見えで、なかなか面白い。私の子供は、便所のなかから、よく下の道を行く人と話していることがある。

晴れた日はえんにたつたまま、雪をかぶつた阿蘇の連峰を眺められるし、やがて菜の花の候になると、菜種の花の官能的な匂いにまじつて、肥やしの臭いが流れこみ蝶が開けつぱなしの座敷を舞いぬけるのである。

私はそんな開放的な、田舎の明るさが好きだから、いまもつて垣をつくろうなどと思つたことはない。しかし田舎の農家でも、一応垣はちやんとある。まして私がこの十年勤務している大牟田の街などでは、大きい住宅は殆ど厳しい煉瓦塀などをめぐらしている。通勤の車窓から、そんないかめしい塀をめぐらした邸宅をみると、私の思考はいつもひつかかる。―どうしてあんな窮屈な垣をめぐらさねばならないかーと。

垣は保守封建のシンボルのようである。また排他的で、利己的で人は信ずべきでないーという思想的基盤にたつてつくられるもののようである。

また「垣」の観念は、小さくは町、村、大きくは国と国が固執している「境界」の観念、黒、黄、白の人類の枠にまで通ずるようである。

私はまず「人をみたら泥棒」と思わねばならぬ生き方はいんけんでいやだし、人生における終局の理想としては「国家の垣をはずし人類が一つにとけあつて生きる世界」を夢みているのだから、人はどうあろうとも、せめて私だけは「垣」のなかの人間にはなりたくはない。一九五九年の隣国は、月であり、火星であり、金星ではないかと思うと、なおさらである。

―一九五九・一・一二―

【時のことば】第二宇宙速度

物体に地球上空で秒速八キロの速度を与えれば、物体は円をえがいて地球を回る（この速度は高度により多少かわる）。人工衛星の原理である。この速度を「第一宇宙速度」とよんでいる。秒速を一一・二キロにすれば地球の引力圏外に脱出、太陽のまわりを回る惑星になる。この速度を「第二宇宙速度」とよぶ。ソ連は一月二日の宇宙ロケットで、第二宇宙速度を出すことに成功し、初の人工惑星を誕生させた。物体がさらに太陽の引力をふりきり、太陽系宇宙の外に脱出するためには、秒速一六・七キロが必要だといわれている。これを「第三宇宙速度」とよぶこともできよう。

通貨の交換性回復

通貨の交換性回復とは一国の国内通貨を自由に外国の通貨、とくに米ドルに交換できるようにする意味で、これによつて各国間の貿易を正常拡大化する。昨年暮、英国が貿易の拡大をはかつて通貨の交換性を回復したことから欧州各国も英国にならつた。これにより欧州各国の貿易競争は激化を招き各国の労働者の賃金にしわよせされるだろうとみられている。

演劇

劇団「葦」の特別公演 実演「人間の條件」

「戦争文学」の決定版として二百五十万の発行部数をみたという問題小説「人間の條件」は先般松竹で映画化、各地で好評を博しているが、今度は劇団「葦」が炎座の後援を得て特別公演することになり各地を巡回中であるが、大牟田には本月二十三―二十四の両日上演されることになつた。

演劇は四幕十二場で、主なスタッフおよびキャストは次の通り

スタッフ

原作＝五味川純平・脚色＝小幡欣次・演出＝久保昭三郎・音楽＝芥川也寸志

キャスト

安井 昌二・杉 葉子・小田切みき・内田 良平・水島 晋・真木 恭介・伊藤 亨治・小池 明義

なお演出者久保昭三郎は同劇上演に当りつぎのように抱負を述べている。

実存主義の演劇のように極限情況を作つて行つてその中に人間を追い込んで試る方法とは自ら出発点が違うけれども、人間の尊厳や可能性を追求する以上は一人一人の性格とか日常的な偶然性に頼らず夫の、妻の、兵隊の、捕虜の、等等の、夫々の立場からの、つまり戦争からの必然の衝突や喰い違いがトラブルや局面を作つて行くような処理が出来れば、頭にすつきりとした芝居が出来上るのではないかと思います。

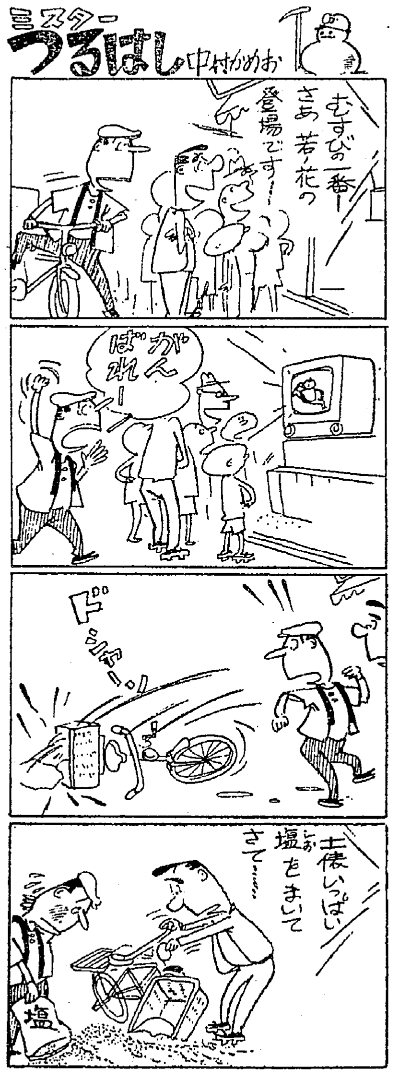
第一回の公演は小説のダイジエストに了らせたくないという関係者の願いが、小幡氏の脚色もさることながら、俳優の好演技によつて一応の成果を収めましたが、今回の稽古は前述のようにもつとシンプルなものにして行こうと試みて見るつもりです。この場合こういつた芝居は意に反して観念的なものに陥る危険があります。この辺は慎重に、これから先機会を得れば何度も再演をくり返して除々に改良されて行くべきものと思います。皆様の厳しい御批判をまつて私達のレパートリーとして一層のよいものにして行く努力を続けたいと存じます。

なお入場料は当日は五百円だが、前売券は二百円。

とき 1月23日昼午後1時
〃 夜午後6時
1月24日昼午後1時

場所 大牟田市民会館

ミスターつるはし 中村かめお



なかまの本棚（18）

誠意のこもつた内容 「週刊わかもの」

「茶の間の図書館」といわれる週刊雑誌は、新聞社が発行しているものをはじめ、かぞえきれないほどたくさんあるようです。

そのどれもが、多数の読者にささえられており、その読者にかなりの影響をあたえていることはうたがえない事実です。

ここに私がすすめようとしている「週刊わかもの」は、それらの週刊雑誌にくらべると、ページ数も少くて、表紙も女優の顔などでかざられたもののような、華麗さはありません。でも、そのような週刊誌にない清潔さと、マスコミによつてあやまつて教えられたことを正しい方向からみつめて教えてくれる誠実さがあります。

さて、その内容ですが、歌舞伎役者の中村かん右衛門さんの連載自叙伝「人生の半分」をはじめ、主幹のぬやま・ひろしさんが話題の人との対談「そのものずばり」には、芸能界のフランキー堺さんから南極越冬隊長までと、あらゆる分野に亘つています。

また、内外政治の情勢をわかりやすく解説した「日本の気流」「世界の気流」は、ブルジョア・マスコミには見られぬ誠実さがあり今日の社会の矛盾点をはつきり私たちにおしえてくれます。

江崎誠致さん（作家）の社会時評「風俗交差点」は、ピリツとしたものを毎号感じさせられます。

そのほか、一週一言、映画紹介、人生相談室、わかものの性典と、なかなか豊富です。

政治・文化・時事・科学・その他と豊富な企画で編集されていて私たち働くものを対象に企画された週刊誌として、若者はもちろん主婦の方々にも広く御購読をおすすめします。

（ほんだ・よしのり）

「週刊わかもの」社発刊
四六倍判16頁 毎日曜刊
送料とも二カ月百円（前納）

家計簿

宮浦 通松 上村一子

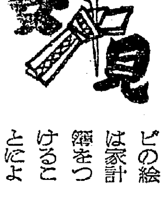
金受け前で家計簿の決算をしていると、子供が「母ちやん、これイワシね?サンマね?」とたずねた。「タイだろう」とはいえません。家計簿の表紙の絵です。

こちらへきて、主婦会に入会するとすぐ二冊の家計簿をもらい面食らつたものです。

子供からきかれて、その家計簿をよく見ると、コークスコンロの上に細長い魚が三尾、魚焼にはさまれてのつている。そのそばに大きなうちわが意味ありげにそえてある。

私は前からもつていたもう一つの家計簿をだして見くらべました。この表紙には鉄筋と思われる洋館に、テレビ塔がたつている。これは農協から配布されたものです。

対照的なこの二つの家計簿の絵をみて、私はこう思つたのです。



サンマの絵は、私たちの生活をそのまゝだしてあるが、安くて栄養をとりたい気持を、テレビの絵は家計簿をつけることによつて、予算生活から各家庭にテレビをうみだしたい希望の絵です。

生活革命運動のひとつとして家計簿をつけましよう運動が展開されていますが、私はこれが形式ばかりでなく、また会社の宣伝資料にならぬよう、その公表には心して、文字通り意のある実績をあげるよう努力しなければならないと思います。

私は家計簿を正確につけることによつて、必ず生活が明るくなるということは、二カ月の実績で自信をもつていえると思います。

しかし、私はいま多額の貯金があるというのではありません。先般都合で、苦境におちた時、「貯金があるならなあー」と思つたことでした。

そしていままでの、無計画な生活を悔い、夫と話し合つて、「サンマの家計簿」に努力を始めました。

闘争にそなえ、また不時の場合の貯えに!!親愛なサンマの家計簿もやがては卒業して、将来テレビの家計簿になじめるよう頑張りたいと考えています。